

昆虫類の登録作業の現状

諏訪哲夫

私が県自然保護課に勤務していた1980年代のはじめ、行政施策に対する職員の提案を募集する制度がありました。そのころすでに県内には昆虫や植物標本がかなり集積され、同好者は県内の調査を精力的に進めていましたので標本はどんどん増えていきました。このままでは到底個人では管理しきれず、貴重な標本が失われてしまう懸念があり、どうにかしなければいけないという機運が高まり始めていました。私はこれらの標本を永久的に保存する施設が必要と感じ、提案に応募しました。

その後、推進協議会およびNPO自然博ネットのご努力があって、2004年から三島の教育研修所の一角で博物館のきっかけともなる標本整理・登録の作業が始まりました。清水の保健所時代を経て2016年には現在のミュージアムとなることが決定し、永年の夢でもあった“博物館”が動き出しました。

現在ミュージアムに収蔵されている昆虫標本は、生前に収集されていた故人や、高齢などの理由で自分では管理できなくなった約50人の方々から無償で県に寄贈されたものです。分類群のおおよその内訳はチョウが30万頭、コウチュウが10万頭、トンボ2万頭で、そのほかの分類群を加えると40万頭を超えています。これらを収めている収蔵庫はチョウ類の収蔵庫とコウチュウを主体とした収蔵庫の2室で、前者はドイツ型大型標本箱が5760箱、後者は4050箱、合計ほぼ1万箱が収納できます。これは全国の県立博物館の中では屈指の収蔵能力となっています。しかし、チョウ類の収蔵庫についてはその収蔵能力の限界にすでに近づいてきています。

チョウの標本についてみますと、国内産の標本はおよそ70%で、海外産はロシアやモンゴルが多く、次いで東南アジアとなっています。そのほかヨーロッパ、南米、北米、アフリカ、オーストラリアなど世界各地に及んでいます。

これらの標本をどのように整理、登録するかが大きな問題です。機会あるごとに各県、各博物館での整理方法を学芸員の方などにお聞きしていますが、それぞれ異なっているのが現状のようです。ここ、ふじのくに地球環境史ミュージアムでは次のように行うことにしました。寄贈者別に整理することを基本として、目別（分類群別）、地域別、種別の順とし、種は系統分類順に並べることにしました。た



現在のミュージアム収蔵昆虫標本

だし本県では、ある分類群（属）については研究対象として利用しやすくするため、寄贈者別の枠を越えて同じ属をまとめて整理することにしています。

整理するにあたり、なんといいっても困難なのは外国の標本の同定作業です。最近では世界の昆虫についての図鑑や資料などが充実してきているのでかなり楽になったとはいえ、昆虫は近縁種が多く正確な同定は時間を要します。時には種の特徴を知ることができる生殖器の解剖をしなければなりません。

次の問題はラベルです。地名しか書いていないので何県なのかわからない。書かれた字が長い年月でインクが薄くなっている。走り書きで読みにくい。ローマ字で書いてある。など様々に採集地を特定しにくいものがあります。中には採集年が西暦と元号どちらか不明などもありますが、寄贈者の行動範囲と時期を調べ、地図やインターネットを見ながら決めなければならないこともあります。これが外国語のラベルの場合に至っては困難を極め、1ラベルを判読しようと1日以上を要し、結局わからなかったこともありました。

いろいろな苦痛を抱えながら、昆虫スタッフは平均年齢70歳を優に超えた9名で地道な作業を重ねていますが、なかなかかどりません。40万点のうち登録できた数は何とか19万点ほどになりましたがまだ先は長く続きます。

標本は自然史を知り、研究のためにはなくてはならない重要な資料であり、県の貴重な財産となっています。これからも着実に作業を進め、少しでも多くの標本の登録を済ませ、これらの標本が様々な活用に役立つよう願っています。